

## 高病原性鳥インフルエンザの発生に備えた防疫演習

紀南家畜保健衛生所

○園部維吹 宮本泰成

藤原美華

### 【背景】

平成 16 年以降、高病原性鳥インフルエンザ（以下、本病）は全国各地で発生しており、本県でもこれまで 4 事例が発生している。本病発生時には、他農場へのまん延を防止するため、迅速かつ円滑な防疫対応が求められる。このため、平時より円滑に防疫対応を実施する体制を整備しておくことが重要である。今回、発生農場を管轄する振興局における防疫対応の確認、及び各関係部局の連携を強化することを目的とした防疫演習を、西牟婁振興局（以下、振興局）管内で実施したので、概要を報告する。

### 【演習概要】

演習実施に際し、事前に振興局各部（地域づくり部、健康福祉部、農林水産振興部、建設部）の担当者と打ち合わせを計 4 回実施した。打ち合わせでは、各部の防疫対応における懸念点を洗い出し、それらをもとに演習の内容を決定した。演習は、机上演習と実地演習の二部構成とした。机上演習では防疫対応の流れの確認と現地対策本部模擬会議、実地演習では集合・検診場所、現地防疫センター、消毒ポイントの設営から運営の訓練と、発生農場での殺処分デモを実施することとした。

演習は令和 7 年 10 月 30 日、田辺スポーツパークで実施し、動員者役 20 名を含めた計 177 名が参加した。今回、振興局管内で約 22,000 羽を飼養する種鶏場を発生農場と想定し、演習を実施した。また、演習終了後に全参加者を対象としたアンケート調査を実施し、実際に本病が発生した場合の防疫対応における問題点や課題を抽出した。アンケート調査について、机上演習の各項目についての理解度を「よく理解できた」、「理解できた」、「少し難しかった」、「難しかった」の 4 段階で選択させた。また、実地演習の各項目の有用性について、「非常に役に立つ」、「ある程度役に立つ」、「役立てづらい」の 3 段階で選択させた。さらに、演習の必要性は「とてもそう思う」「思う」「あまり思わない」「思わない」の 4 段階で、今後の防疫演習への参加意欲は「今後もぜひ参加したい」「参加してもよい」「参加の必要を感じない」3 段階でそれぞれ選択させた。その他、演習全体への意見は記述式とした。なお、この演習は公益社団法人畜産協会わかやまと和歌山県との共催で実施した。

机上演習では、本病発生時における県全体の防疫対応の流れを講義形式で説明し、特に発生農場を管轄する振興局の各部の役割について、

重点的に確認を行った。また現地対策本部模擬会議では、実際に現地対策本部会議に出席する振興局長、各部部長、紀南家畜保健衛生所長、田辺市農林水産部長が出席し、家畜保健衛生所が作成している防疫計画をもとに、対応の分担や進捗状況等、初動対応について確認を行った。その他の参加者には、別室で行われている会議の様子をオンライン会議ツールで配信し、視聴できるようにした。

実地演習では、集合・検診場所、現地防疫センター、発生農場、消毒ポイントを模した各エリアを設営し、振興局各部員 35 名が、その他の各振興局から参集した動員者役 20 名を相手に実際に運営する形で実施した。集合・検診場所エリアでは、地域づくり部及び健康福祉部が検診、血圧測定、問診及び診察、防護服セットの配布、手荷物の預かり等、集合・検診場所の運営訓練を実施した（図 1）。現地防疫センターエリアでは、農林水産振興部が防護服の着衣及び脱衣の手順と、農場への入退場の流れを説明し、その後動員者役に対して着脱補助の訓練を行った（図 2）。発生農場エリアでは、家畜防疫員が模擬鶏を使用して捕鳥から殺処分、梱包までの一連の流れについての説明と実演を行い、その後、動員者役が 10 名ずつ 2 班に分かれて演習を行った。また、想定農場は平飼い鶏舎であるが、ケージ飼い鶏舎での捕鳥方法等の作業の流れについても同時に実施した（図 3）。消毒ポイントエリアでは、建設部がトラック等車両の誘導、動力噴霧器を用いた車両の消毒、車両消毒済み証の作成や書類への記入等、消毒ポイントの運営訓練を実施した（図 4）。

### 【結果及び考察】

今回の演習への参加人数 177 名は、これまで本県で実施してきた防疫演習では最大規模であり、県全体における危機意識が向上していることが伺えた。アンケートの回収率は 70.9%（117/165 人）であった。アンケートでの、机上演習の各項目についての理解度の結果は、95%以上が「よく理解できた・理解できた」と回答し、演習によって防疫対応への理解度が向上したと考えられた（図 5）。つぎに実地演習の各項目の有用性の結果は、97%以上で「非常に役に立つ・ある程度役に立つ」との回答が得られた（図 6）。また、今回の実地演習中に、防護服を着用し、作業を行っていた動員者役 1 名が体調不良となったこと、消毒ポイントでの動力噴霧器の動作不良という二つのトラブルが発生したこともあり、記述回答では、このような不測の事態が実際の防疫対応で起こった際の対応について、事前に策を講ずるべきであるという意見が複数あった。演習全体を通して、演習の必要性と、今後の演習への参加意欲について質問した結果、演習の必要性については 96.6%が「とてもそう思う・思う」と回答、演習への参加意欲については、96.6%が「今後もぜひ参加したい・参加してもよい」と回

答した（図7）。また、演習全体に対する記述回答で、防疫作業や演習未経験者が積極的に演習に参加することが重要との回答が複数あった。防疫演習の継続的な実施と同時に、演習参加候補者の実際の発生農場での防疫作業経験や演習への参加経験を把握し、どちらも未経験の職員に対して積極的な演習への参加を促すことが重要であると考えられた。

#### 【まとめ】

今回実施した防疫演習は、防疫対応の理解度向上に効果的であった。今後も継続して防疫演習を実施するとともに、未経験者に積極的な参加を促すことで、防疫作業への理解度の更なる向上を目指していく。また、不測の事態への対応については平時より検討が必要であり、作業者の肉体的・精神的な負担に対しては、防疫作業中の体調管理の徹底や作業後のメンタルケアを充実する等の体制と体調不良者が出た場合に対してもあらかじめ体制を整備しておくことが重要であると考えられた。資機材の動作不良については、平時から定期的に動作確認を行うこと、機材の使用法や注意点を確認しておくこと、備蓄資機材リストを関係部局が日頃から確認し、機材が使用できなくなった場合の借用先を想定しておくなどの対応が考えられた。また、今後の防疫演習に不測の事態への対応策を訓練する内容を盛り込むことで、防疫対応の質をより高めることができると考えられた。このように、防疫演習を通して県職員が防疫対応について理解し、また平時よりシミュレーションを行うような環境を作ることが、実際の防疫対応を円滑かつ迅速に行うために重要であると考えられた。



図1 集合・検診場所エリア



図2 現地防疫センターエリア



図3 発生農場エリア



図4 消毒ポイントエリア

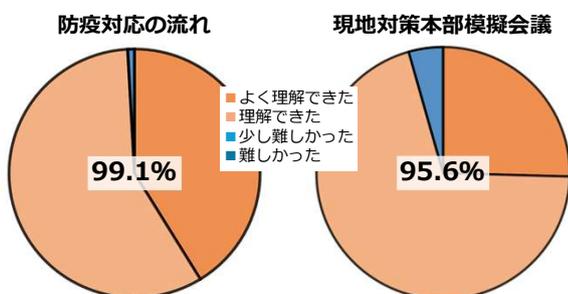


図5 アンケート結果 (机上演習)

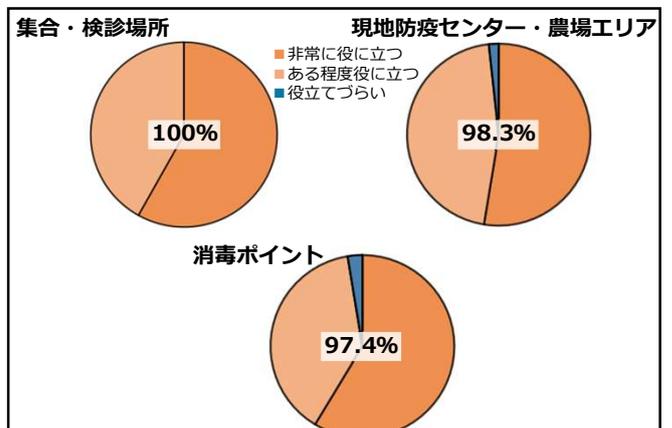


図6 アンケート結果 (実地演習)

